

ネワール族の住まいと住生活における行動規制について
—ネパール・カトマンドゥ盆地のティミ市居住区 10 番の場合—

A STUDY ON THE DWELLING AND THE BEHAVIOR RESTRAINT
IN THE DWELLING LIFE OF THE NEWAR PEOPLE
—In the case of Thimi City Ward 10 in Kathmandu Valley ,Nepal—

ラトナ・ケサリ・プラジャパティ
Ratna Keshari PRAJAPATI

1. はじめに

1-1 本研究の背景と目的

ネパールは連邦民主共和国であり、東西と南はインド、北は中国のチベット自治区に接する東西に細長い国である。ネパールは歴史的に文化（文明）の交差点に位置し、チベット文明とインド文明、西のムギの文化と東のコメの文化のそれぞれを受容し、融合的な文化あるいは重層的な文化をつくりだしてきた。また、多民族・多言語国家であり、学校・職場等では公式・共通言語のネパール語^{注1)}が使用されているが、各家庭の中では主として民族固有の言語が使用されている。

ネパールの中心部に位置するカトマンドゥ盆地とその周辺は、コメの文化領域の影響が優位を占める地域であり、先住民族のネワール族^{注2)}がこの地域に小文明を築いて来た。ネワール族はヒンドゥー教と仏教を信仰し、アニミズムの世界に生きてきた民族である。

筆者はネパール連邦民主共和国のネワール族で、美術大学大学院に留学するまでは、カトマンドゥ盆地のティミ（Thimi）市居住区 10 番に住んでいた。そのような経緯から、本研究はネパール・カトマンドゥ盆地のティミ市のネワール族の住まいの空間構成、住み方、住生活における行動規制について考察するものである。

ティミ市はカトマンドゥから東部へ 10km、バクタプルから西へ 3km のところに位置している。旧ティミ市は 1997 年にバルクマリ（Bal Kumari）、チョパチョ（Chapacho）、ボデ（Bode）、ナガデス（Nagadesh）、デベソリ（Dibashwori）などの 17 の居住区を合併し、マデェプールティミ市になった。

マデェプールティミ市の面積は 11.47sq. km で、標高 1325 メートル高地、人口は 4,7751 人、住宅数は 9551 戸で、主に農業で生計を立てているシュレスータや陶器づくりなどで生計を立てているプラジャパティなどのカーストの人びとが住んでいる。

以下、本研究では、マデェプールティミ市を単にティミと呼ぶことにする。

1-2 本研究に関する既往文献と本研究の位置づけ

ネワール族の住まいとマチについての多くの既往文献がある。また、ネパールの最高カースト家庭における「けがれ」の観念についての既往文献もある。

Sturzbecher ら (1986)¹⁾ はネワール族の住宅構成の発展について述べ、ネワール族の伝統的住宅が信条に基づいてつくられている、としている。Gutschow ら²⁾ はマッラ時代のネワール族のマチ・ムラがヒンドゥー教に基づいてつくられている（Hindu theory of the ideal town）、と述べている。また、R. Herdick (1987)³⁾ はギリティプル（Kritipur）のネワール族のマチと社会構成などについて報告している。三瓶（1991）⁴⁾ は、ネパールの最高カーストといわれているブラーマン（Brahman）族のウパディヤ・ブラーマン（Upadhy Brahman）の家庭での「けがれ」の観念、「けがれ」をめぐる慣行、日常生活における規制について報告している。

ティミのネワール族については、U. Muller (1981)⁵⁾ が経済・社会構成について述べ、M. Panti ら (2001)⁶⁾ は、マチの空間構成とコミュニティの構造および、デワリー（dewali）と呼ばれる儀式に関する重要な伝統的文化制度について述べている。

本研究は、これらの既往研究を参照しつつ、ティミの居住区 10 番における住宅事例調査、聞き取り調査およびアンケート調査の結果について考察したものである。



図1：カトマンドゥ盆地とティミ市の位置

2. ネワール族の住まいの空間構成と各階各室の使われ方

ネワール族の住まいは4～5階建てのものが多く、ティミで調査した住宅事例の一つを取り上げ、各階の空間構成を図2に示す。また、5つの住宅事例について、各階各室の使われ方を表1に示す。

住まいの1階（地上階）はネワール語ではチェリ（Cheri）と呼ばれ、1階全体が土間で、倉庫、便所があり、仕事場になっている。

1階の階段を上がって2階（ネワール語でマトン、Matan）の部屋に入る手前で履物を脱ぐ。2階はいくつかの部屋に分かれていて、ネワール語でドクク・コタ（Dhuku kota）と呼ばれている財産を保管する部屋とマトン・コタと呼ばれる寝室で構成されている。ドクク・コタと呼ばれる部屋にはラクシュミ（Laxmi）というヒンドウ教の女神がまつられている。2階は厚い壁と格子窓（ネワール語でティキジャ、Tiki Jhyaa）で壁面が構成され、格子窓は室内から外が見られるが外から室内を見ることができないため、外部に対して安全な場所であると考えられている。しかし、最近の新しい住宅では木製のガラス窓に変わりつつある。

3階（ネワール語でチョタ、Chota）は広い空間であり、家族がくつろぎ、接客する場所になっている。また、3階にはネワール語でチョタ・コタと呼ばれる寝室が設けられる場合が多い。2階および3階の通路部分も就寝場所として使われている場合もある。3階の伝統的な窓は大きな窓で、窓のデザイン様式によってネワール語でガー・ジャ（Ga Jhyaa）またはサ・ジャー（Sha Jhyaa）と称されている。大きな窓としたのは、2階が外部に対する安全性を重視したのに対して、3階は居住性を重視したためであると考えられる。しかし、最近の新しい住宅ではこの大きな窓は木製のガラス窓に変わりつつある。

4階建ての住宅の最上階はネワール語でバイガア（Baiga）と呼ばれている。バイガアには、竈（ネワール語でブトゥ）やガスコンロ

がある。露台はネワール語でコウシ（Kausi）と呼ばれ、コウシはバイガアに隣接するか、屋上に設けられる。コウシは日当たりがよい場所で、穀物を乾燥させ、洗濯をして洗濯物を干し、沐浴をする場所として使われている。

5階建ての場合の4階部分は、ネワール語でピヤタ（ピヤは4、タは階の意味）と呼ぶ場合とバイガアと呼ぶ場合がある。ピヤタと呼ぶ場合の4階部分の機能は、3階（チョタ）と似たような機能で家族室や仕事場になっており、5階がバイガアと呼ばれる炊事・食事空間になっている。4階部分をバイガアと呼ぶ場合はそこが炊事・食事空間になり、5階部分はニヤタ（ニヤは5、タは階の意味）と呼ばれ、その機能は多人数の人びとが参加する儀礼や祝祭行事の場になる。

各階は階段（ネワール語でスワナ、Suwana）でつながっている。1階（チェリ）は土足空間であるが、2階（マトン）から上の階の床には雌牛の糞と赤土を混ぜたシューツァ・ソ^{注3）}（シューツァは赤土の意味、ソは糞の意味であるがこの場合は雌牛の糞を指す）を塗り、裸足で暮らしている。

ネワール族の家族は、息子が結婚すると親と同居し、娘の場合は結婚すると家を出る。息子夫婦が親と同居する場合、炊事・食事を共にする場合もあれば別にする場合もあり、様様ではない。

また、家族の成長・拡大段階に応じて10人を超える大家族の場合もあれば、3～4人程度の小家族もある。（図3）

3. 住まいにおける宗教的行為と「けがれ」の観念に基づく行動規制

ネワール族の主婦は、朝起きて、住まいの1階正面の出入り口（ネワール語でピカルクという。ピカは外、ルクは出入り口の意味で、ピカルクはネワール族にとって住まいの内外を分ける重要な意味を

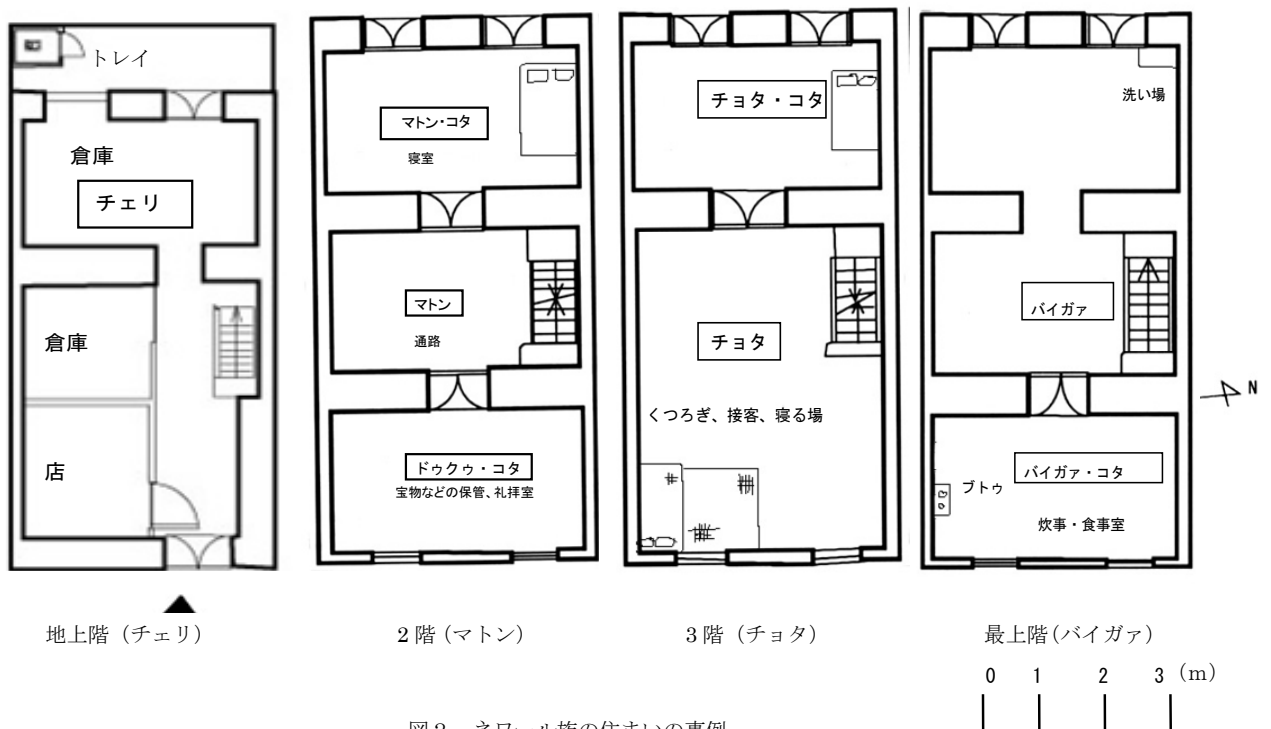


図2 ネワール族の住まいの事例

持っている、とのことである）とその前の神（ネワール語でクマル）が宿るとされる石の周辺を掃く。その後、ヒンドゥー教の女神ラクシュミがまつられている2階のドゥクゥ・コタと呼ばれる部屋を掃き、続いて1階土間、ドゥクゥ・コタ以外の2階、3階、最上階（バイガア）を順に掃く。すべてが掃き終わったら出入りに雌牛の糞と赤土を混ぜたシューツァ・ソを塗る。その後、井戸ないし水道から水を汲み、2階のドゥクゥ・コタと呼ばれている部屋をはじめ、住まいの中にまつられている神々に水をかけて礼拝をする。

ヒンドゥー教では、食べ物は森羅万象を創造しているブラフマーという神そのものである、とされている。食べ物は人間の身体、精神、感動などを支配し、生きていく上で重要なものであるから、食べ物を尊敬しなければならない、というヒンドゥー教の教えである。したがって、炊事・食事空間では、食べ物に係わる宗教的行為が行われている。

これらの宗教的行為は、行為に係わる人も行為を行う場所も「けがれ」を有してはならないし、「不潔」な状態にしてはならない、ということになる。そこで、以下、「けがれ」の観念に基づく住まいにおける行動規制の実態について述べる。

ネワール族の炊事・食事は朝夕2回であり、炊事は通常女性が行う。女性は、炊事を行う前に顔を洗い、沐浴をして身体を清める。食事は家族そろって行うが、食事を始める前に「清め」の儀式を行い、神々と先祖に食べ物を供える。そのことによって神々から人が祝福される、というのがヒンドゥー教の教えである。また、食事については、「食べている人の唾がつくとけがれる」という観念が存在する。そして、唾がつかないようにするために、食事には「食べ始めたら立ち上がってはいけない」「食べている人は炊事の場所に入ってはいけない、調理器具に触ってはいけない」という行動規制を伴う。この「食物授受規制」はヒンドゥー教の教えに基づくものである。

そして、炊事の場所がけがれてしまった場合は、「食器を洗う」「つくった食べ物を家畜の餌にする」「炊事をする場にシューツァ・ソを塗る」といった「清め」の行為を行う。また、食事が終わったら、床にこぼれた食べ物などを、牛糞で包み込むようにして拭き取り、床にシューツァ・ソを塗って清めたり、水をふりかけたりする。

さらに、ネワール族には、「月経になった女性はけがれている」という観念があるため、月経になった女性は「宗教的な行為をしては

表 1 各階各室の使われ方

調査住居番号	居住する人数とカースト	築後年数	バイガア (5F)			バイガア (4F)			チョタ (3F)		マトン (2F)			チェリ (1F)
			コウシ	バイガア	ドゥクゥ・コタ	コウシ	バイガア	ドゥクゥ・コタ	チョタ	チョタ・コタ	マトン	マトン・コタ	ドゥクゥ・コタ	
1	6(シュ)	約200年	—	—	—	沐浴	食ガブ神	—	応寝	応寝	通路	応寝	神	—
2	5(ブラ)	約70年	—	—	—	—	食ガ	神	寝	寝	応寝	—	—	ト
3	5(シュ)	4年	沐浴	—	—	—	食ガ	神	寝	寝	通路	応寝	—	ト
4	5(ブラ)	5年	沐浴	応	神	—	食ガ	—	寝	応	寝	応寝	—	ト
5	9(ブラ)	約70年	沐浴	食ガブ	—	—	食ガ 応寝	—	応	応寝	通路	寝 応	神	—

食：炊事・食事室

寝：寝室

ブ：ブトゥ（竈）

（ ）はカーストを示す

—該当する部屋がないことを示す

ト：トイレ

ガ：ガスコンロ

応：接客室

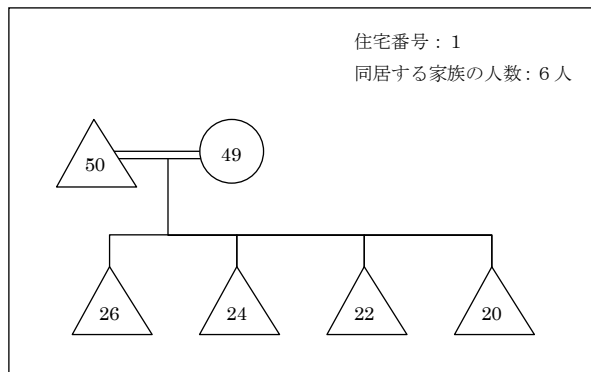
(シュ)：シュレスータカースト

沐：沐浴場

洗：洗濯場

神：神をまつる部屋

(ブラ)：プラジャパティカー



△：男性
○：女性

△=○は夫婦を表す。

破線で囲んだグループが炊事・食事を別にする。

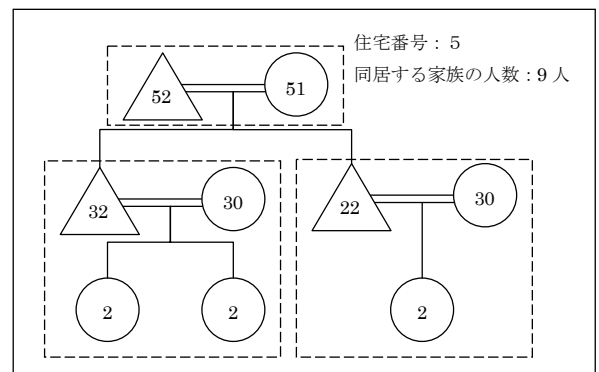


図3：調査住宅の家族構成の事例と家族が炊事・食事を別にする事例

いけない」「宗教的な行為を行う場所に入ってはいけない」「炊事・調理をしてはいけない」といった行動規制が存在する。最近では、月経になった女性が炊事・調理してもいいとする家も多くなっているが、それでも「月経になった女性が炊事・調理した食べ物はけがれているので、神々や祖先に供えてはいけない」とされている。

4. 下位のカーストに対する住居への進入規制

ネワール族社会のカースト（ネワール語ではジャートという）制度は、職業・仕事に基づく身分差別制度があるが、その実態は複雑である。この身分差別制度は、自己のカーストより下位のカーストの人間を「けがれた存在」として位置づけているために、その結果として、下位カーストが上位カーストの住まいへ進入することについての種々の規制が存在している。以下、ティミにおける聞き取り調査の結果からその実態について述べる。

①不可触民と言われている道を掃くことを仕事としているポデー（Pode）、チャミ（Chami）、ホロ（Hala）などの下位カーストは、「上位カーストの住まいに入ってはいけない」とされてきた。しかし、最近では、1階の土間や階段を上がって2階の部屋の手前まで、すなわち土足空間の範囲までは進入してもいい、という変化が現れてきている。

②触った水を飲んではいけないと言われている肉屋（ネワール語ではナエ、Nay）、音楽屋（ネワール語ではズギ、Jugi）などのカーストは、上位カーストの住まいへの進入について「2階までは入っていい」とされてきたが、最近では「3階まで入っていい」という変化が現れている。

③触ったご飯を食べてはいけない、といわれている油製造職人（ネワール語ではサエミ、Sayami）、行事・儀式等での爪・髪切り職人（ネワール語ではノウ、Nau）、鍛冶屋（ネワール語ではコウ、Kau）などのカーストは、上位カーストの住まいの3階と3階からの階段を上って最上階（パイガエ）に入る手前までは入ってもいい、とされてきたが、最近では「炊事・食事空間に入らなければいい」という変化が現れてきている。

④同じカーストと上位カーストは、ラクシュミという女神がまつられている2階のドゥクウ・コタと呼ばれる部屋以外は住まいのど

も進入できる、とされている。

以上のように、ティミにおいては、下位カーストに対する住居への進入規制についての規制緩和傾向がみられるが、女神ラクシュミがまつられているドゥクウ・コタと呼ばれる部屋への家族以外の進入は依然として規制され、また、下位カーストの炊事・食事空間への侵入規制は現在も維持されている。

下位カーストの炊事・食事空間への進入規制は、最上階を炊事・食事空間としてきたネワール族の住まいのあり方を決定づけている有力な根拠になるのではないかと推察される。

だが、カトマンドゥ盆地の都市近郊では、低層住宅の1階で炊事・食事を行う事例も散見されており、ネワール族の伝統的な住まいとその住生活のあり方は、「けがれ」の観念の緩和傾向と連動しながら今後大きな変化をもたらすであろう、と予見される。

5. アンケート調査の結果からみた「けがれ」の観念

ネワール族が抱いている「けがれ」の観念について、ティミの小学校の4～5年生の父母・祖父母に対してアンケート調査を実施し、24戸から回答を得た。回答数は統計処理に耐えられるものではないことを承知しつつ、以下、その結果について述べる。

①回答者の属性は、男79%・女21%（図4）、20～40歳83%・40歳以上13%となっている。回答者の住宅は4階建て12戸（50%）、5階建て5戸（21%）、6階建て2戸（8%）、2～3階建て3戸（13%）、1階建て8%になっている（図5）。また、最上階を炊事・食事空間としている住宅は88%で、1階で炊事・食事をする住宅は12%となっている。（図6）。

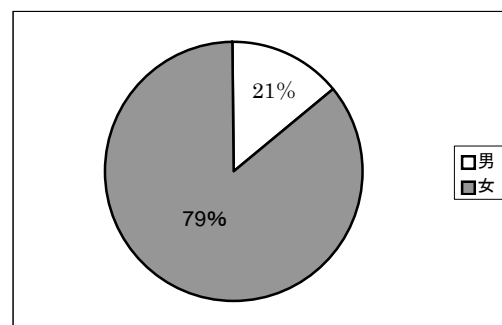


図4：回答者の属性

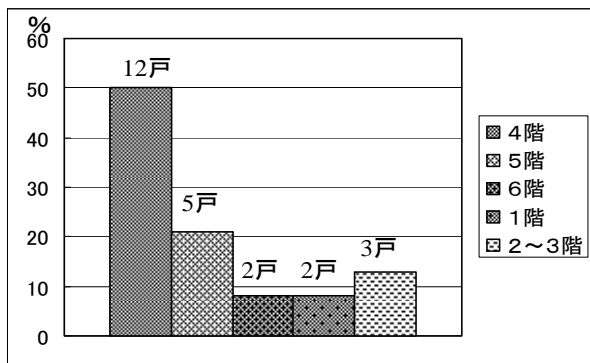


図5: アンケート調査回答者の住宅の階数

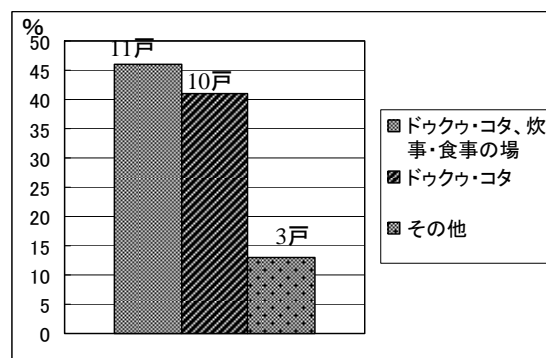


図9: 月経の女性が入ってはいけない場所
(現在の状況)

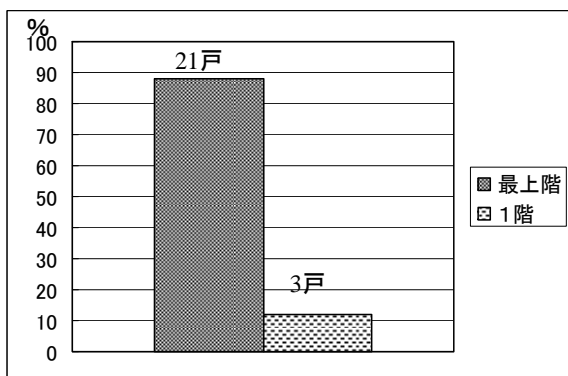


図6: アンケート調査回答者の炊事・食事の場所

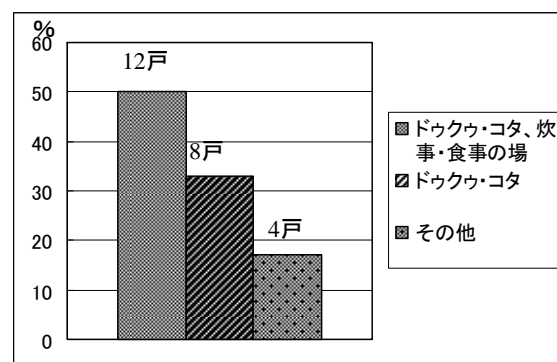


図10: 月経の女性が入ってはいけない場所
(回答者が子どもの頃の状況)

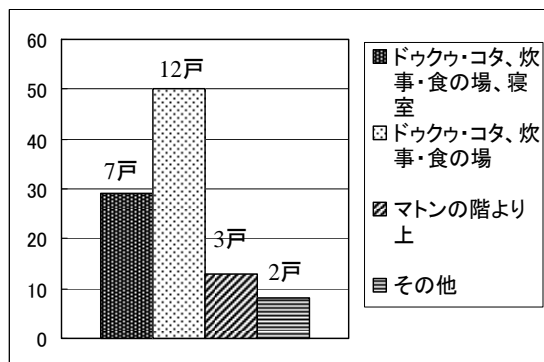


図7: 下位カーストに対する住まいへの進入規制
(現在の状況)

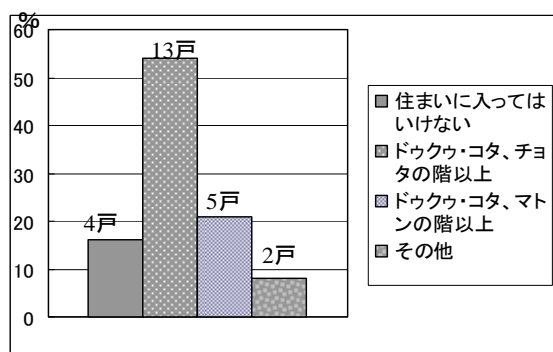


図8: 下位カーストに対する住まいへの進入
(回答者が子供の頃の状況)

②住まいの中で「下位カーストが進入してはいけない」とした場所は、ドゥクウ・コタと炊事・食事空間であるとしているが(図7)、回答者が子どもの頃と現在では進入規制が緩和されてきていることが読み取れる(図8)。

③「月経時の女性が炊事・食事空間に入ってはいけない」という行動規制については、規制緩和傾向が読み取れるが、今なお規制が働いていると読み取れる(図9、10)。

6. 歴史的にみたネワール族のマチと住まいの成り立ち

聞き取り調査によると、ティミのマチは王宮(ラエク、Layaku)を中心に形成され、王宮の周辺に上・中級カーストが住み、マチの周辺には下位カーストが住んでいた、とのことである。このことは、R.Heridick がギリティブルのネワール族のマチの成り立ちについて述べていること符合している。

ティミのマチは、小高い丘の上に形成されており、マチの周辺は水田・畑等の農地になっている。すなわち、マチの範囲は「小高い丘の上」という地勢的制約をもっている。また、マチに入る門が四つのあり、その一部が今も現存している。王宮も現存していたが、現在は学校施設として使われている。

これらのことを踏まえると、ヒンドゥー教を教義とする王権がカースト制度によって人々を支配しながらマチをつくってきた、と推察される。王権の支配力は、支配する人口が多いほど強大になるわけであるから、「小高い丘の上」という範囲・領域が限られたマチへ

外部からの人口流入が始まった時代があったに違いない。

限られた範囲・領域のマチで人口増加が起これば、住宅は平屋建てから敷地面積を狭小化させて積層化せざるを得ない。一方、王宮建築も王権の支配力を象徴するものとして次第に高くなっていったものと思われる。その建築技術が4～5階建ての住宅建設を可能にしたものと考えられる。

では、なぜ4～5階建ての住宅の最上階で炊事・食事をするようになったのか？狭く急な階段を上がって炊事・食事のための水を運ばなければならないわけであるから、大変なことである。その理由は、すでに述べたヒンドゥー教の「食物授受規制」にあると思われる。すなわち、下位カーストが炊事・食事空間へ進入することを防止するためではなかろうか？また、地面は下位カーストの人々も自由に移動する空間であるから、地面から最も離れた最上階を炊事・食事空間にしたのではなかろうか。現時点では推察の域を出ないが、筆者はそのような経緯があったものと考えている。

7. おわりに

本研究は、ネパール・カトマンドゥ盆地のティミのネワール族の住まいの空間構成、住み方、住生活における行動規制について考察した。その結果、以下の知見を得た。

1) ネワール族にとって、住まいにおける炊事・食事と神々への礼拝は神聖な宗教的行為であり、これらの行為を行う場所と行為を行う人は「けがれ」を有してはならない、とされている。

2) ネワール族は、月経中の女性をけがれた存在とみなし、また、自分のカーストより下位のカーストの人々をけがれた存在とみなしている。そのため、月経中の女性は神聖な場所である炊事・食事空間に立ち入ることは禁じられており、下位カーストの人々はカーストのランクによって住まいの各階・各室への進入が規制されている。しかし、近年は「けがれ」の観念が変化し始め、住まいにおける行動規制が緩和され始めている。

3) ネワール族の4～5階建ての縦長住宅が成立した経緯について考察し、限られた範囲・領域の王権が支配するマチに王権が外部から人口を流入させたため、ネワール族の住まいは垂直方向へ積みあがっていったものと推察される。

4) 4～5建て住宅の4階または5階を炊事・食事空間とした理由については、ヒンドゥー教の「食物授受規制」に基づいているためと考えられる。すなわち、炊事・食事空間は神聖な場所であるため、けがれた下位カーストの人々が炊事・食事空間へ進入することを防止し、また、下位カーストの人々が行き交う地表から最も離れた場所に炊事・食事空間を位置させる必要があったため、4階または5階に炊事・食事空間を位置させたものと推察される。

しかし、本研究で得られた知見がティミ以外のネワール族のマチと住まいでも同様かどうかは、現時点では確認できていない。また、最近では農地が宅地に転用され、低層住宅が新築されつつあるが、それらの住まいでのカーストと「食物授受規制」についての実態も把握できていない。

ネパール連邦民主共和国は、今日、「近代化」へ向けて急ピッチで変わりつつある。その過程で、伝統的なネワール族の4～5階建ての縦長住宅は、高齢化対応を含めてどう変わっていくのか、どう変えていくべきかが今後の住宅政策上の重要な課題になると思われる。

参考文献

- 1) K.Sturzbecher ,S.Amatya,YogeshwarK.Parajuli ; Experiences InPreservation and Restoration in a Medieval Town,pp.3-11,1986
- 2) Gutshow Niels ; Bhaktapur Nepal, pp.Lit 3, 1988
- 3) R. Herdick ; Lit. 37, PP17-25, 1987
- 4) 三瓶清朝：ネパールのブラーマンの家庭におけるけがれと社会構造、民族学研究、PP. 383-405, 1991
- 5) Muller U ; Thimi,Social and Economic Studies on a Newar Settlement in the Kathmandu Valley,Liebig-University Giessen,1981
- 6) Mohan P、Shuji Funo ; 日本建築学会系論文集、第540号、pp.197-204 ,2001.2

注

注 1) ネワール族の母国語である。チベット・ビルマ、インド・アリア語系である。

注 2) インド・アリア語系の言葉であり、ネパール全国で話す言葉である。

注 3) 牛はヒンドゥー教では、ラクティミという女神の化身であり、シブ神の乗り物として祈られている聖なる存在である。シューツァは赤土の意味、ソは糞の意味。ティミ市では) 雌牛の糞をサ・ソと呼ぶが、雌牛の糞に赤土（シューツァ）が混じっている場合シューツァ・サ・ソではなくシューツァ・ソと呼ぶ。

謝辞

本研究における調査および修士論文の取りまとめのご指導を頂いた美作大学大学院富樫教授に心より深く感謝致します。

そして、美作大学大学院修士課程に留学中に、経済的な援助をいただいた船盛学部長と生活アドバイスをいただいた山口研究科長ほかご支援をいただいた諸先生方に心より感謝申し上げます。

また、現地での調査にご協力をくださった方々、アンケート調査にご協力をいただいた方々、参考資料の紹介をいただいたネパールの建築学科の方々、調査に協力してくれた家族に心からお礼を申し上げます。